

Daughters of the Vicar と脱構築*

染 谷 昌 弘

1. はじめに

D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の『牧師の娘たち』(*Daughters of the Vicar*,¹ 1913) には、労働者階級に対して、階級的に優位に立つ4人の牧師の家族が登場する。しかし、その階級意識は、時代的な背景から起因する俗物性を孕むものであり、実体を伴わないものだった。現状は、牧師とその妻は、牧師という生業から生まれる経済的貧困にあえぎ、牧師としての存在に敬意を払わない労働者階級で、非国教会に属する炭坑夫の共同体に対して、怒りと憎悪を感じてさえたのである。牧師一家の各人は、そのような自分たちの置かれている現状に対して強い自意識を持ち、内心は忸怩たる思いを抱いていた。母親のリンドレイ夫人 (Mrs Lindley)、姉のメアリ (Miss Mary)、妹のルーザ (Miss Louisa) は、この実体のない、階級的な誇りから生じる虚無感を払拭するために、現状からの脱出をそれぞれの仕方で図ることになる。

F. R リーヴィス (F. R. Leavis) は、特にメアリの、実体のない階級意識から生じる虚無感からの脱出の過程を、思考過程と心理過程の詳細な分析によって、説明している。論者は、このリーヴィスの心理分析による、メ

* 本稿は、日本英語文化学会第129回月例会 (2014年12月13日、於: 昭和女子大学) での発表、「『牧師の娘たち』と脱構築」の内容に加筆、修正を加えたものである。当日、司会を務めてくださった加藤英治氏 (法政大学非常勤)、また、会場での聴講を賜わり、質問、コメントを頂いた各氏に対して、この場を借りて感謝申し上げる。また、日本英語英文学会、編集委員長の野村忠央氏、および、匿名の査読委員に深く謝意を表す。尚、残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。

アリの結婚の決断に至る思考過程と心理過程は、ポスト構造主義のデリダ (Jacques Derrida) の脱構築 (deconstruction) の理論と符合すると推論する。本論は、いわゆる文学理論の埒外に置かれているリーヴィスが、見事に詳細に分析した、メアリがマッシー氏 (Mr Massey) の求婚を受け入れるときの思考過程と深層心理の動きが、ポスト構造主義のデリダが提唱した脱構築、特に、代補 (supplement) の運動と符合することを論ずるものである。

2. メアリのアイロニー

論のはじめに、メアリのアイロニーについて考えてみたい。この場合のアイロニーとは、一般的に、「物語に登場する人物が孕む重要性が読者、観客には明快なのに、当人はその重要性がわかっていない」という意味を持つ。何らかの重要な真実は、当人のあずかり知らぬところで展開している。メアリのマッシー氏との結婚の決断に至る経過は、このアイロニーを孕んでいる。

メアリは、将来が保証されている、若い牧師のマッシー氏からの求婚を、最終的には受け入れる。当初、メアリはマッシー氏の小柄で、病弱な肉体が好みに合わなかった。それどころか、メアリはそのような彼の肉体に、心底から嫌悪感を抱きさえする。しかし、彼女の「誇り高く」「純粋な精神」(56) は、肉体を犠牲にすることによって、聖職者のマッシー氏との結婚を選択する。このとき、メアリは、自分は金銭的な保証と階級的な地位を得るために、肉体を代価として支払った、つまり、マッシー氏との結婚によって得られる、階級的な地位と経済的な安定は、肉体の犠牲という代価を支払うことで、贖われる、と考える。しかし、実のところ、メアリは、このような概念的な図式を立てて、それを口実に、自らを納得させようとしたに過ぎないといえる。この心的な過程は、リーヴィスの言葉では、ある「抑圧」(103) を孕むものである。本来、高潔な精神によって、肉体を放棄することは、不可能なことである。不可能なことを無理やり押し通そうとすれば、「抑圧」が生じることは必然である。メアリはそのように観念的な整理を施して、結婚に対する性急な解決と納得を図ったに過ぎないといえる。メアリが構築した肉体と精神という概念的な二項対立は、実際に

は、表裏一体なものであり成立不可能である。それは、肉体に精神が宿るという意味ではない。後に述べることになるが、精神と肉体という言葉の概念自体が、二項対立を阻み、表裏一体であるという意味である。メアリの高潔な精神は、自らの肉体を切り捨てて、それを口述にして、マッシー氏との結婚を成就させることはできない。その証拠に、メアリは、時間の経過を待って、思いもよらなかった、肉体の復活を、マッシー氏との間の子という形で、獲得することになるからである。

メアリは、思考の慣習によって、自ら組み立てた高潔な精神と肉体という階層秩序的二律背反を、マッシー氏との結婚の選択の根拠とした。しかし、実際にメアリを動かしたのは、彼女自身が気づかない、何かしら別のものによってである。リーヴィスはメアリのこの心的過程を「アイロニカル」(104)と形容している。小説では、次のように描写されている。

She was a pure will acquiescing to him. She selected a certain kind of fate. She would be good and purely just, she would live in a higher freedom than she had ever known, she would be free of mundane care, she was a pure will towards right. She had sold herself, but had a new freedom. She had got rid of her body. (56)

メアリは、「純粋な意志」、「純粋な正しさ」、「正義」、の刃を振りかざして、「より低いもの」、「肉体」を切り捨てようとする。その見返りとして、「夫から得たすべてのもの」、つまり、「物質的なものからの自由」と「世間での地位というもの」に対する贖いを果たそうとする。メアリの実体のない階級的な優越感は、このように、切ったり張ったりすることで、相殺されるような、実体のないものであるともいえる。実際には、メアリは「自己を売る」ことはできないし、「肉体を売る」ことも不可能なことである。前述したように、メアリは、ただこのように抽象的な方程式を立てて、いわば、「イコールゼロ」とすることによって、自らを納得させ、解決と決定を図ったに過ぎないのである。けな気といえ、そうだが、そのけな気を生むものも、メアリの形而上学ではなく、何か別のものであるに違いない。メアリのこの強い心の「抑圧」は、依然として、残存し続けることになる。

リーヴィスは、このときのメアリの心理に対して、“this high-mindedness, this idealism, is revealed as essentially not separable from its opposite—or its ostensible opposite.” (80)と鋭い分析を施している。メアリが、抽象的、観念的に整理して納得しようとしたにもかかわらず、依然として残存するある「抑圧」があった。それは、「高潔な精神と観念論」がメアリを支配し、一極に振れたときに、その逆の方向に対して反転していくための、いわば、「位置エネルギー」を蓄えることになる。リーヴィスは、この「抑圧」の「位置エネルギー」を、「その逆のものと本質的に分ちがたく結びついている」という表現を使って説明している。「高潔な精神と観念論」の「逆のもの」とは何を意味するのだろうか。リーヴィスは直接の言及を避けているが、それは、メアリの肉体である。メアリの肉体と「高潔な精神と観念論」が分離しがたく、「本質的に分ちがたく結びついて」いたのである。メアリは、このアイロニーをしばらくの間、肉体の復活の象徴である、子供の誕生まで、抱えることになる。そして、ついにメアリは、肉体の復活の象徴である赤ん坊を身ごもる。

Her heart hurt in her body, as she took the baby between her hands. The flesh that was trampled and silent in her must speak again in the boy. After all, she had to live — it was not so simple after all. Nothing was finished completely. She looked and looked at the baby, and almost hated it, and suffered an anguish of love for it. She hated it because it made her live again in the flesh, when she *could* not live in the flesh, she could not. (57)

メアリは、自ら構成した二律背反の図式によって放棄したはずの肉体を、再び子という形で獲得する。はじめは、その現実を受け入れられずに、戸惑うばかりである。そして、「結局、自分は生きなければならないのだ—結局問題はそれほど簡単ではないのだ。何一つとして完全にけりのついているものはなかった。」と述懐し、「高潔な精神」のために犠牲にしたつものの、肉体の存在の意味の重要性に気づき、少しずつ、肉体の象徴である、自らの子を認知しはじめる。

メアリの「高潔な精神と観念論」は、「逆のもの」、つまり、肉体と「本質的に結びついていた」。精神と肉体の二律背反による分離は、実は分離

されずに、一つのものとして、存在している。メアリは家庭環境や教育で身につけた思考習慣を、この人生の大きな岐路で、選択し、応用しようとした。メアリの高潔な精神は、肉体を代償として、牧師の妻という、実体のない階級的な優越への贖いを果たそうとした。しかし、放棄したはずの、精神に対するとおりの肉体は、メアリの意識の及ばないところで、確実に、生き残っていたのである。

さらに、メアリがうち立てた、概念の二律背反は、ロレンスの中心的な思想である、「大いなる生」(Great Being) という他者を背景あるいは前提としていると考えられる。メアリに選択、決定を許したのは、実は、概念の二律背反ではなくて、メアリの意識の外の第三のもの、「大いなる生」という他者である。メアリは、はじめから第三のものとしての「大いなる生」という他者に応答し、その運動に巻き込まれていたといえる。メアリの選択、決定は、以上のようなアイロニーを孕んでいたのである。

3. デリダの脱構築、代補

イーグルトン (Terry Eagleton) は、デリダをいわゆる文学理論の一つとして、*Literary Theory: An Introduction*, 2008において紹介している。デリダの理論は、ハイデガー (Martin Heidegger) の『存在と時間』(*Sein und Zeit*, 1927)で行った仕事を批判的に引き継いでいる。それは、古代ギリシャ以来の形而上学の言説を「解体」(destruction)する試みであり、つまりそれは、プラトン以来の存在論の歴史の解体を意味する。脱構築 (deconstruction) というデリダの造語は、このハイデガーの「解体」を土台にしている。プラトン主義哲学の形而上学は、アイデアを本源とする、諸概念の階層秩序的二項対立、諸価値の二元論的分割をその本幹としている²。高橋哲哉は、以下のように、デリダの難解な表現に、平易な解釈を施している。

形而上学の夢は、階層秩序的二項対立の優位に立つ項 (A) が純粹に現前し、劣位にある項 (B) が無に等しくなる場面を実現することにある。そのために形而上学者は、二項が決定不可能な仕方では混交し流動している現実から、(B) を排除し、(B) が (A) に対して端的に外部にあるような状態を作り出そうとする。(A) の内部に (B) 的な要

素がいったいなく、(A) に対して (B) がまったくの外部にあるときこそ、(A) が純粋に現前するといえるからだ。このことは、形而上学的二項対立のどんな二項についてもいえる。(82)

内部と外部、自己と他者、同一性と差異、本質と見かけ、起源と反復、真理と虚偽、善と悪、生と死、精神と肉体、知性的と感性的、時間的と空間的、固有と疎遠、自然と技術、文化と文明、人間と動物、男と女、西洋と東洋、現実と虚構、まじめと不まじめ、哲学と文学、意味と記号、パロールとエクリチュール³などのような、階層秩序的二項対立は、西洋哲学の形而上学の基礎であり、およそその正典となっている。しかし、デリダは、これを問い直している。デリダの脱構築の中心的な思想である「代補」に、高橋は、次のように解釈を施している。

外から偶然的な補足物として本体に付加されるものが、本体の内部に侵入し、そこに棲みつき、それに取って代わってしまうという運動—デリダはこれを代補 (シュプレマン、サブリメント) の論理と呼ぶ。形而上学からみれば、これは恐るべき混乱、墮落、倒錯以外の何ものでもないが、しかし形而上学はこれを防ぐことができない。外部を内部から排除しようとする運動はけっして完全には成就しない。何故なら、外部が単純な外部であり、二次的偶然的な補足物であるという表象自体、決定不可能なものを決定しようとする形而上学的欲望の産物であって、内部と外部の絶対的な境界線などはじめからなかったのだからである。(86)

絶対的だと見えていた、形而上学の土台をなす階層秩序的二項対立は、実はそうではなかった。分割される各項は、決定不可能性を孕み、流動的、可変的、代理的であったのである。一つの項の純粋性は、対になる項によって、侵入を受けて、それに取って代わられてしまう。この働きを、デリダは、「代補」と名付けている。「代補」の論理は、内部の内部にすでに外部が含まれている、そして、その二項は交換可能であるという、ラディカルな思想である。デリダは、『グロマトロジーについて』(Of Grammatology, 1974) において、「代補」について、次のように述べている。“It

intervenes or insinuates itself *in-the-place-of*; if it fills, it is as if one fills a void. If it represents and makes an image, it is by the anterior default of a presence” (145).⁴外部は、内部の「欠如」として、また、付加するものとしてはじめから意識されている。つまり、何ものかの内部には、すでに、「欠如」としての外部が含まれている。さらに、付加される外部は、内部を損ない、それにとって代わるというのである。また、デリダは、『声と現象』(*Speech and Phenomena*, 1973)において、フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl) の言説を引用して、「代補」のアレゴリーを提示している。

A name on being mentioned reminds us of the Dresden gallery. . . . We wander through the rooms. . . . A painting by Teniers . . . represents a gallery of paintings. . . . The paintings of this gallery would represent in their turn paintings, which on their part exhibited readable inscriptions and so forth.⁵ (104)

デリダは、「おそらくすべては、こうして始まった」(104) と述べ、フッサールの現象学の言説の中に「代補」の痕跡とその起源を読み取っている。フッサールのこの言説は、「内部の内部には外部が含まれる」という「代補」のアレゴリーの表現となっている。以上のように、およそ西洋哲学の正典である、アイデアを本源とする階層秩序的二項対立は、「代補」の運動による、決定不可能性、流動性、代理性を孕んでいたのである。

さらに、階層秩序的二律背反の決定不可能性は、第三のもの、他者の可能性を示唆している。形而上学が徹底して排除しようとしたものは、この他者の存在である。デリダが唱える、第三のもの、他者について、高橋は、以下のようにデリダの言説に解釈を与えている。

モデル (パラダイマ=原型) とその模写にあたる、アイデア的なものと感覚的なもの、知性的なものと同視的なもの、「つねに同一を保つもの」と「生成するもの」。プラトン主義形而上学の屋台骨をなすこの二項対立に対して、明らかにここではその限界が指摘され、「第三の種族」(*triton genos*) の必要が説かれている。……「プラトニズムのあらゆる二項対立」のプラトン自身による脱構築。対立項のいずれで

もないが、両者を包摂し、両者の関係をそのなかで可能にする中間地帯、第三のもの。(95)

プラトン哲学の形而上学の階層秩序的二項対立により生じた両項は、この「第三のもの」である他者を前提としている。混沌とした、「第三のもの」としての「アポリア」⁶的な他者が、形而上学の二項対立を成り立たせるための前提の働きを負っている。高橋は、「固定化し、自明化した既成の言説的・制度的構築物を決定不可能な他者の経験—アポリアの経験—に開くこと、そしてその経験のなかで決定の責任を問いなおすことである」(314) とデリダの唱える「アポリア」の経験を解説している。

デリダは、この階層秩序的二項対立の問い直しを要求するものは何か。この責任はどこから来るのかと、根源的な問いを発し、その究極的な存在は「全き他者」(tout-autre) であるとする。我々がすることは、形而上学の暴力を否定し、「差延」(différance)⁷ という時間的な引き伸ばしによって、際限なく、少しずつ、「正義」の方へ向かう他はないとしている。そして、ついに脱構築は、階層秩序的二律背反とは異なる決定を下すことになる。このような「差延」を要求する、究極的で根源的な「全き他者」をデリダは措定していた。デリダの脱構築、「代補」は、伝統的な形而上学の階層秩序的二項対立を解体して、根源的な他者への開示を果たしていたのである。

4. 脱構築とメアリのアイロニーとの符合

リーヴィスが鋭く分析した、メアリのマッシー氏を受け入れるときの思考過程と深層心理の動きと、それに伴うアイロニーは、デリダが唱えた脱構築の理論と符合すると考えられる。メアリが構成した、肉体と精神という二項対立の概念は、実は表裏一体をなしていた。前述したように、それは、肉体に精神が宿するという意味ではない。精神と肉体という言語の概念自体が、二項対立を阻み、分離不可能であるという意味であった。メアリは、物質的なものと世間での地位とを贖うために、肉体を棄てて純粋な精神を獲得しようと決意した。伝統的な精神と肉体という階層秩序的二項対立の概念を、何の疑いもなく、単に習慣的な言語表現を用いて構築し、それによって、自らを納得させようとしたのである。マッシー氏が見せる、

一種哲学的な思考過程に普段から敬意を払うメアリは、自らも、それに同調して、高位の「誇り高く純粋な精神」によって、低位の肉体を切り捨てようとした。メアリの階層秩序的二項対立は、デリダの脱構築の理論と同じく、決定不可能なものであった。メアリの精神と肉体という階層秩序的二項対立は、実は、そもそもはじめから、言語の概念のレベルから、不成立であったのである。実際には、メアリの精神の内部の内部には、切り捨てたつもりでいたにもかかわらず、「欠如」として意識される肉体がすでに入り込んでいたのである。

メアリを決定に導いた他者は、ロレンス文学の神髄である、「大いなる生」のことであった。それは、「暗い神」(Dark God)という神性をも孕むものでもある。メアリは、「大いなる生」、「暗い神」によって、無意識の領域で、第三の決定の方へ導かれていたのである。一方、デリダの脱構築もまた、階層秩序的二項対立が、排除しようとしてきた、第三のもの、他者を擁護している。徹底した意識の働きによる、「差延」の果てに、真実に至ろうとする、根源的な善性がある。なぜ、人間は「差延」による時間的な引き伸ばしによって、少しでもより良き方へ進もうとするのか。そこには、根源的な「全き他者」からの呼びかけがあるからである。メアリは、無意識のうちに、デリダの提唱した脱構築の「全き他者」に相当する「大いなる生」によって、呼びかけられ、導かれ、マッシー氏を受け入れるという選択、決定を下したのである。そして、メアリがこのようなアイロニーから解放されて、真実と善性を自覚するためには、肉体の復活の象徴である、子供が誕生するまで待たなければならなかったのである。

再び、リーヴィスの分析を見てみることにする。“this high-mindedness, this idealism, is revealed as essentially not separable from its opposite—or its ostensible opposite.” リーヴィスの、言語の概念に対する深い洞察を伴う、いわゆる「精密な読解」(close reading)によるこの分析は、まさに、デリダの脱構築そのものであるとってよい。リーヴィスは、デリダが活躍した、ポスト構造主義の時代を見据えた理論を展開していたといえる。以上のように、リーヴィスの「精密な読解」による心理分析によって明らかにされた、メアリのアイロニーと、ポスト構造主義のデリダの脱構築との符合を認めることは可能である。

5. おわりに

イーグルトンは、1983年の時点で、“We have moved, in other words, from the era of structuralism to the reign of post-structuralism,” (116) と述べている。デリダが論を展開したのも、この「ポスト構造主義」の時期と重なる。イーグルトンは、ロレンスやリーヴィスは、「19世紀のロマン主義者たちの継承者である」(37) と批判している。二人は、産業資本主義による、人間性の疎外を是正するために、社会システムを政治的に分析することはなかったからである。しかし、リーヴィスが、デリダの脱構築と符合する論理を展開していたとすれば、イーグルトンは、リーヴィスに与えた自らの批判を、修正しなければならなくなるだろう。つまり、リーヴィスのロレンス批評は、デリダのラディカルな論考と同質であり、ポスト構造主義の理論に匹敵する、あるいは、少なくとも、その先駆けとなっているといえるからである。そして、デリダに比肩するほどに、社会的に重要な意味合いを孕んでいるからである。

今日、デリダは、イーグルトンが、*Literary theory*の「あとがき」で述べているように、「人気はかなり衰えている」(196)。例えば、それは、フロイト (Sigmund Freud) などとは対照的である。しかし、論者は、デリダの「代補」や「差延」の概念が表しているような、ロゴス中心主義による、ものごとの暴力的な一元的判断を避け、他者、「アポリア」の呼びかけに応答し、決定を先延ばしにして、何らかの根源的な「正義」を、際限なく追い求めようとする、人間の持つ志向性は、今日の社会においても重要な価値を持つと考える。そして、そのことは、リーヴィスがロレンス文学の中心的なテーマと評した、「大いなる生」という「他者」についても、等しくあてはまることである。

注

1. テキストは、Lawrence, D. H. “Daughters of the Vicar.” *The Prussian Officer and Other Stories. The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence.* Ed. John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1983. 40-87を使用した。尚、引用ページ数は同書のものである。
2. デリダは、言葉（ロゴス）を真正の言葉である充実した、話す言葉のパロールと、頹廢した、書かれた言葉のエクリチュールとに分ける。プラトン哲学

では、パロールはアイデアであり、エクリュールはその影である現象界である。そして、前者が優位であり、後者が劣位に位置する。西洋哲学は、この階層秩序的二項対立を柱とする、ロゴス中心主義を正典としている。デリダは、ハイデガーの『存在と時間』を受け継ぎ、彼の思想を換骨奪胎して、この正典を解体しようとする。

3. この階層秩序的二項対立の例は、高橋（83 その他）を参照した。
4. 拙訳を付す。「それは、「～の代わり」にやって来る、あるいは挿入される。それが補足するのは、まるで、ある空隙を埋め合わせるが如くである。それが代理をし、代わりになるのは、現前に先立つ欠如の故である」。
5. 拙訳を付す。「ある名前が口に出されるのを聞くと、私たちはドレスデンの画廊を思い起こすことになる……。私たちはいくつかの展示室をめぐり歩く……。一枚のテニールスの絵に……ある画廊が描かれている……。その絵の中の画廊にもまた、何枚かの絵が描かれていて、そこでは、それぞれの絵の題名が判読できる、などなど。」
6. 高橋は、「アポリア」を「ギリシャ語で一般に、通過できないこと、出口がないこと、手段がないことなどから、解決困難な矛盾、難問を意味するが、デリダは文脈によって、パラドクス（逆説）、アンチノミー（二律背反）、ダブル・バインド（二重拘束）、さらには「不可能なもの」などと使い分けている。」と説明している。さらに、「他者との関係はアポリアである。他者を他者として知るためには他者を知ってはならない。他者を知るためには他者を私の世界の一部とし、私の理解可能な地平に他者をとりこみ、他者の他者性を内化、同化しなければならないが、そのとき他者は全き他者ではなくなってしまう。他者は到達不可能なものとして到達されねばならない。」(314) と説明を加えている。
7. 高橋は、「差延」を「現前の形而上学は、なんらかの現前する存在者であれ、現前する意味であれ、また時間的現在であれ、一般に現前する同一者を根源的なものと想定している。しかし、およそあらゆる同一者は、他者との差異においてのみ、またそれ自身の反復においてのみ同一なものとして構成されるであり、この差異と反復、すなわち差延の運動に権利上先立つ同一者は存在しない。……要するに、他者への関係を抹消した〈自己自身〉なるものはけっして存在しえない。階層秩序的二項対立のいかなる項も純粹現前しえないのは、差延がつねに他者への関係を持ちこむことによって、同一者の現前を無限に延期するからである。」(311) と説明している。

参考文献

Derrida, Jacques. *Of Grammatology*. Trans. Gayatri Chakravorty Spivok. Baltimore: The John Hopkins UP, 1997. Trans. of *De la Grammatologie*. 1967.

- . *Speech and Phenomena. And Other Essays on Husserl's Theory of Signs*. Trans. David B. Allison and Newton Garver. Ed. John Wild. Evanston: Northwestern UP, 1973. Trans. of *La Voix et le Phénomène*. 1967.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. Anniversary ed. With a new preface. Minneapolis: Minnesota UP, 2008.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence Novelist*. London: Chatto, 1955.
- Lawrence, D. H. “Daughters of the Vicar.” *The Prussian Officer and Other Stories. The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence*. Ed. John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1983. 40-87.
- 高橋哲哉 『デリダ—脱構築』(講談社, 2003年)

(東洋大学非常勤)
some@ja3.so-net.ne.jp